

若手人材教育と レジリエント建築の 創造に向けて

Toward New Young Members' Education and
Creation of Resilient Architecture

竹脇 出 | Izuru Takewaki

第56代日本建築学会会長・京都大学教授



新年あけましておめでとうございます。日本建築学会（以下、本会）会員の皆様にとりまして、2020年が健やかで輝かしい年になることを心より祈念申し上げます。

今年は約半世紀ぶりのオリンピック・パラリンピックが東京で開催される年であり、世界から注目されています。私は、昨年5月の会長就任に際し、建築界および本会の持続的発展のために、「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」の促進に努力したいと表明しました。具体的には、以下の3点に注力したいと述べました。

- ・ バランスのとれた体制での若手人材の育成
- ・ レジリエントな社会構築への建築の貢献（レジリエント建築の創造に向けて）
- ・ 幅広い会員の要望に真摯に応える運営

就任後の半年間に実行できたことは必ずしも多くはありませんが、副会長、理事、監事の方々のご協力により、少しずつ着実に進めることができたと考えております。これからさらに加速させ、会員の皆様に認めていただけるよう努力する所存です。

重点タスクフォースの立ち上げ 「若手教育タスクフォース」

昨年10月に、「若手教育タスクフォース」と「レジリエント建築タスクフォース」の二つのタスクフォースを立ち上げました。

少子化に向かうに際し、将来の本会および建築界を担う若手会員をどのように育成するか、また若手

会員の活躍の場をいかに提供するかは待ったなしの重要課題であるといえます。そのためには、若者にとって魅力のある学会、若者が光り輝く学会、自身の成果を積極的に発表しようと思いたくなるような学会にすることが重要と考えています。この課題に対応するために、「若手教育タスクフォース」を立ち上げました。現在、この「若手教育タスクフォース」で検討している課題としては以下のようなものがあります。

(1) 学会論文集のオープンアクセス(OA)化が予定されており、2021年4月より本会会員のみならずすべての国民が閲覧可能なゴールドOAとなることが決定しています。これにより、論文集会員率の低かった若手会員・学生からの即時アクセスが可能となります。なお、2018年に発刊された本会主導の国際専門誌である『JAR』は既にゴールドOAです。学会論文集のOA化は、私が副会長時代に提案した経緯があり、論文集会員購読制度の廃止に伴う予算上の問題が存在しましたが税制優遇により実施可能となりました。ゴールドOAにより、広く日本全体への発信が可能になると期待されます。

(2) 若手会員の積極的な参加には表彰制度の充実が重要と思われます。大会学術講演において現在ほぼすべての調査研究分野で導入されている「若手優秀発表賞」をさらに積極的に発展させ、調査研究委員会等の主催で開催される投稿型シンポジウムにおける若手優秀発表賞もさらに発展するよう努力したいと思います。

(3) グローバル人材育成プログラムの継続を通じて、学生の海外留学や若手人材の海外活動をさらに積極的に発展させたいと考えています。我が国では、近年、若者の内向き志向が強くなり、海外の大学へ留学したいと考える学生数が減少しています。昨年5月の会長就任の挨拶でも書かせていただきましたが、学術分野における我が国の国際的ステータスの低下は顕著なものがあり、ランキング等の評価には反映されない本質的な面での地盤沈下は極めて深刻な課題といえます。アカデミアや先端技術分野での我が国の研究者・技術者のコミットメントの低下等はその最たるものと思われます。若手人材の育成等を通じて確かな回復の流れへと持っていく必要があります。

(4) 2018年12月に建築士法が改正され、一級建築士の実務要件が受験資格から合格後の登録制へ移行されることとなりました。これに伴い、学部卒業後の大学院在学中に一級建築士受験が可能となり、大学院教育に大きな影響が出るのが危惧されています。現在、全国建築系大学教育連絡協議会において検討を行っており、国土交通省や建築士会連合会と

も検討を進めております。一方で、実務要件認定に論文などの研究実績を考慮する方向でも検討が進められています。これをインセンティブとして、大学院生の4割程度の本会への入会率をさらに高めることが期待されています。

(5) 以前から叫ばれていることですが、博士後期課程進学者の確保は、科学技術立国としての我が国にとって第一義的に重要な課題です。その課題を克服するには、課程修了後の受け入れ先の確保が重要な役割を果たします。本会として、博士後期課程修了者の民間への就職を後押しするような活動を積極的に進めていきたいと考えています。

(6) 運営委員会や小委員会等の調査研究委員会の委員への若手会員(40歳未満)の積極的登用を行っていただくよう、学術推進委員会等を通じて依頼しています。当該分野における研究活動、委員会活動において世代間の緊密な連携を維持することは持続的発展にとって重要と思われます。ある程度の年代比率や若手委員数等の目標設定を行うことはそのような持続的発展にとって有益と考えられます。

「レジリエント建築タスクフォース」

レジリエント建築タスクフォースでは、「レジリエント建築」を本会として強力に推進するための検討を行っています。前述の「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」を考えると、計画／設計・構造・環境のあらゆる分野の会員が集まるうえで共通の目標を設定することが必要であると思われます。我が国では一昨年と昨年、地震・豪雨・台風等の自然災害による被害が、従来にも増して大きな問題となりました。そこでは、これまでの統計的な常識ではカバーできないような事象が多数観測されています。このような予測が困難な時代においても有効となる方策について、「レジリエント建築」という側面から建築界および本会をあげて取り組む必要があると思われれます。

レジリエンスという用語は、我が国では2011年の東日本大震災以降に盛んに使われるようになりました。政府による国土強靱化基本計画もレジリエントな国土・社会を実現するために策定されたものと思われれます。レジリエンスを構成する二つの要素として、抵抗力と復旧力があります。それぞれにおいて、計画／設計・構造・環境の要素が深く関係しており、レジリエント建築は、まさに計画／設計・構造・環境のあらゆる分野の力を結集しないと実現できません。また、レジリエント建築は、学術・技術・保険など、建築以外の分野も含めた広範な領域と深く関

係するテーマであり、建築界および本会をあげて取り組むべきテーマと思われれます。

レジリエント建築を考えるうえで、サステナブル建築との関連も重要となります。アーバン・レジリエンス(UR:強靱化)とアーバン・サステナビリティ(US:持続可能性)の概念は学術の世界では最近特に注目されており、URとUSの両者を独立して追求すると必ずしも共存となる結論ではなく相反となることも報告されています。相反の関係とならずに共存の関係となるような施策が今後の建築界にとって重要と思われれます。SDGsへの貢献とともにタスクフォースにおいて検討を進めたいと思います。

2020年1月号の『建築雑誌』から、「レジリエント建築」をテーマとするいくつかの特集を組むことが予定されています。また、今年の秋には、「レジリエント建築」をテーマとするシンポジウムを開催し、2021年度には技術部門設計競技を実施したいと考えています。多くの会員の方々の積極的な参加を期待します。

ビジョン2025の中間評価タスクフォース(予定)

中島会長時代に検討され、古谷会長時代に継続された30の課題・目標から構成される中長期計画「ビジョン2025」の継続と中間評価を行いたいと思います。そのためのタスクフォースを今年の4月に立ち上げたいと考えています。

今年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックとともに、2025年には大阪で万国博覧会が開催予定です。このような世界的なビッグイベントに備えて我が国の建築界が果たすべき役割は極めて大きなものがあります。我が国の存在感を高めるとともに、災害にもレジリエントに対応できる仕組みについて本会として全力で取り組んでいきたいと考えています。

皆様にとりまして、輝かしい充実した1年となることを祈念して年頭の挨拶とさせていただきます。